

山形大学歴史・地理・人類学論集、第六号、七九―九〇頁、二〇〇五年

「古代の辺要国と四天王法」についての補論

三 上 喜 孝

【キーワード】 四天王法 境界認識 古四王神社 毘沙門天信仰

はじめに

筆者は前稿で、九世紀の古代の日本海沿岸諸国で、国土鎮護のための四天王法がさかに行われていたという文献史料の記載をふまえ、それがこれまで考えられていたよりも広がりをもっていたと考えられること、―具体的には、国レベルだけでなく郡家レベルでも行われた可能性があることや、さらに出羽国内にあつては沿岸部のみならず内陸部においても行われたと考えられることなど―を出土木簡から指摘し、これが九世紀の日本列島における境界意識の問題と深く関わるものであることを論じた¹⁾。こうした視点で辺境における境界意識について注目していくと、さらに様々な素材を用いて論ずることが可能であるように思える。そこで本稿では、前稿でふれることのできなかった史料や、その後あらためて検討した素材を取りあげて、同様の視点から論ずることにしたい。

一 四天王法と国土鎮護、対外関係

国土鎮護を目的とした四天王寺建立の淵源として、前稿では中国の『宋高僧伝』にみえる、玄宗皇帝の時代の、不空三蔵による毘沙門天信仰の記事をとりあげ、辺要国の軍事施設に四天王を祀るという政策は、唐の影響を受けて、国家主導で進められたのであろうと論じた。だが、敵国調伏の意味で四天王寺が建立されることは、朝鮮半島にも見られる。むしろ朝鮮半島における四天王寺造営の影響も視野に入れなければならないだろう。

『三國遺事』巻第二 文虎王 法敏

明年、高宗使_下召_三仁問等_二議_レ之曰、爾請_三我兵_二以滅_レ麗。害_レ之何耶。乃下_三円扉_一、鍊_三兵五十萬_一。以_三薛邦_二為_レ帥。欲_レ伐_三新羅_一。時義相師西学入唐。来見_三仁問_一。仁問以_レ事論_レ之。相乃東還上聞。王甚憚_レ之。会群臣問_三防禦策_一。角干金天尊曰、近有_下明朗法師入_三龍宮_一、伝_三秘宝_二以来_上。請詔問_レ之。朗奏曰、狼山之南有神遊林。創_三四天王寺於其地_一、開_三設道場_一則可矣。時有_三貞州使_一走報曰、唐兵

無數至「我境」。廻「槩海上」。王召「明朗」曰、事已逼至如何。朗曰、以「彩帛」仮構矣。王以「彩帛」營_レ寺、草構「五方神像」、以「瑜珈明僧」十二員、明朗為「上首」。作「文豆婁秘密之法」。時唐羅兵未「交接」。風濤怒起、唐舡皆没_二於水_一。後改「朔寺」、名「四天王寺」。至_レ今不_レ墜「壇席」〔国史大改朔在「調露元年己卯」〕

〔明年「六六九年」、高宗、仁問等を召して之を議して曰く、爾、我兵を請ひ以て麗を滅ぼし、之を害するは何ぞやと。乃ち円扉に下し、兵五十万を鍊り、薛邦を以て帥と為し、新羅を伐たんと欲す。時に義相師、西学入唐し、来たりて仁問に見ゆ。仁問事を以て之に論し、相乃ち東に還り上聞す。王甚だ之を憚り、群臣を会して防禦の策を問う。角干の金天尊、奏して曰く、「近ごろ、明朗法師の龍宮に入り、秘法を伝え以て来ること有り。請う詔して之を問はん」と。朗奏して曰く、「狼山の南に神遊林有り。四天王寺をその地に創りて道場を開設せば則ち可なり」と。時に貞州の使有りて走報して曰く、「唐兵無數我が境に至り海上に廻槩す」と。王、明朗を召して曰く、「事已に逼り至れり。如何」と。朗曰く「彩帛を以て仮に構えん」と。王、彩帛を以て寺を営み、草にて五方神像を構え、瑜珈明僧十二員を以て明朗を上首と為し、文豆婁の秘密の法を作る。時に唐羅の兵未だ交接せざるに、風濤怒起し、唐船皆水没す。後に寺を改め朔め、四天王寺と名づく。今に至るまで壇席を墜さず〔国史に大いに改め朔むるは調露元年己卯（六七九）に在り〕。

これによると、新羅では、唐と同盟を結んで高句麗を滅ぼした後、今度は唐の襲来を恐れ、これを調伏するために、狼山の南の神遊林

に「四天王寺」を建てたという。『三国史記』卷第三十八、雜志第七、職官上によれば、四天王寺の造営や補修については四天王寺成典のもとに行われたとある。²⁾ 実際、狼山南麓の四天王寺址からは、木塔を東西に配した伽藍が確認され、緑釉・褐釉・無釉三種の四天王浮彫像の断片が発見されている。四天王寺は、一般的には護法・護国の寺院であるが、この場合、きわめて強い反唐的性格を持っていたことを田中俊明氏は指摘している。³⁾ つまり新羅における四天王寺造営は、即自的なものではなく、対自的な性格を持つている点が注目される。こうした四天王寺の対自的性格は、日本海沿岸諸地域の四天王寺のあり方と類似しているといえよう。

二 出羽国府と古四王神社

前稿では、秋田城跡（秋田市）に隣接する古四王神社に着目し、これが、『類聚国史』天長七年（八三〇）の地震の記事にあらわれる秋田城内の「四天王寺」と関わりが深いと考えられること、したがって、古四王神社の存在は「越王」伝承との関わりで考えるべきでなく、日本海側諸地域で広く行われていたと思われる四天王法との関わりで考えるべきものであること、などを論じた。

古四王神社は、秋田、新潟、山形、岩手、福島などの北方の限られた地域に分布している点が特徴である。秋田城とそれに隣接する古四王神社の存在が、九世紀における国家の四天王法という宗教政策によって結びつけることができるのであれば、他の古四王神社についても、同様の検討をおこなってみる価値はありそうである。より具体的にいえば、古四王神社の立地や分布が、古代の北方地域の政

治的拠点や軍事的拠点とどのように関連するのが次の課題となる。

出羽国についてみると、まずは出羽国の政治的拠点である出羽国府との関連が問題となる。ただ、出羽国府の位置をめぐってはこれまでに多くの議論がある。出羽国成立当初、国府は出羽国出羽郡（現在の庄内地方）に置かれていたと考えられているが、設置当初の出羽国府の正確な位置については不明である。その後の出羽国府をめぐっては、天平五年（七三三）に秋田城に移転したとする「秋田城国府説」と、天平五年に移設されたのは軍事的施設としての「出羽柵」であって、出羽国府の機能は八世紀も依然として庄内にあったとする「秋田城非国府説」が対立している。

八世紀の出羽国府については議論が分かれるところだが、平安時代になると、『日本三代実録』仁和三年（八八七）五月二十日条の記載により、出羽国府が移転したことがわかる。

『日本三代実録』仁和三年（八八七）五月二十日条

先是、出羽守從五位下坂上大宿祢茂樹言、国府在出羽国井口地。即是去延暦年中、陸奥守從五位上小野朝臣岑守、抛大將軍從三位坂上大宿祢田村麻呂論奏所建也。去嘉祥三年地大震動、形勢變改。既成窪泥。加之海水漲移、迫府六里所。大川崩壞、去隍一町余、兩端受害、無力堤塞。堙没之期在於旦暮。望請、遷建最上郡大山郷保宝士野、拋其險固、避彼危殆者。太政大臣・右大臣・中納言兼左衛門督源能有・參議左大弁兼行勘解由長官文章博士橘朝臣広相、於左仗頭、召民部大輔惟良宿祢高尚・大膳大夫小野朝臣春風・左京亮藤原朝臣高松等、問彼国遷府之利害。所言參差、

同異難定。更召伊予守藤原朝臣保則、以高尚等詞問之。保則言、国司所請、非無理致。保則高尚等、元任彼国吏、必知土地之形勢。故召問之。太政官因国宰解状、討覈事情曰、避水遷府之議、雖得其宜、去中出外之謀、未見其便。何者、最上郡地在国南辺、山有而隔。自河而通、夏水浮舟。纔有運漕之利。寒風結凍、曾無向路之期。況復秋田雄勝城、相去已遥、烽候不接。又奉納秋饗、国司上下、必有分頭入部、率衆赴城、若沿水而往、泝水而還者、徵發之煩更倍於尋常、通送之費、將加於黎庶。晏然無事之時、縱能兼濟、警急不虞之日、何得周施。以此論之、南遷之事、難可聽許。須挾旧府近側高敞之地。閑月遷造、不妨農務。用其旧材、勿勞新採。官帳之數、不得增減。勅宜依官議、早令行之。

（これより先、出羽守從五位下坂上大宿祢茂樹言す、「国府は出羽国井口の地に在り。すなわち、これ去る延暦年中、陸奥守從五位上小野朝臣岑守、大將軍從三位坂上大宿祢田村麻呂の論奏に拠りて建てる所なり。去る嘉祥三年、地、大いに震動し、形勢變改して、既に窪泥と成る。しかのみならず海水漲移して、府に六里の所に迫る。大川は崩壊し、隍を去ること一町余なり。兩端に害を受け、堤塞するに力無し。堙没の期、旦暮に在り。望み請うらくは、最上郡大山郷保宝士野に遷し建て、其の險固に拠り、彼の危殆を避けんことを」てえり。太政大臣〔藤原基経〕・右大臣〔源多〕・中納言兼左衛門督源能有・參議左大弁兼行勘解由長官文章博士橘朝臣広相、左仗頭に於いて、民部大輔惟良宿祢高尚・大膳大夫小野朝臣春風・左京亮藤原朝臣高松らを召し

て、かの国の府を遷すの利害を問う。言うところを参差して、同異を定め難し。更に伊予守藤原朝臣保則を召して、高尚らの詞をもつてこれを問う。保則言す、国司の請うところ、理致無きにあらず。保則・高尚ら、もと、彼の国の吏に任ぜられ、土地の形勢を知るべし。故に召して問う。太政官、国宰の解状により、事情を討覈して曰く、「水を避けて府を遷すの議は、その宜しきを得ると雖も、中を去り外に出るの謀は、未だその便を見ず。何となれば、最上郡の地は国の南辺に在り、山有りて隔たり、河よりして通ず。夏は水に舟を浮かべて、纔かに運漕の利有れども、寒風に凍を結べば、曾て向路の期無し。況んやまた、秋田・雄勝城、相い去ること已に遙かにして、烽候接せず。また挙納・秋饗に、国司上下すること、必ず分頭して部に入り、衆を率いて城に赴くこと有り。若し水に沿いて往き、水を浜りて還らば、徴発の煩、更に尋常に倍し、通送の費は、將に黎庶に加わらん。晏然にして事無き時は、縦い能く兼濟するも、警急・不虞の日は、何ぞ周施するを得ん。これを以てこれを論ずるに、南遷の事、聴許すべきこと難し。須く旧府の近側の高敞の地を択び、閑月に遷し造り、農務を妨げず、その旧材を用い、新採を勞することなかるべし。官帳の数は、増減すること得ざれ」と。勅すらく「宜しく官議に依りて、早くこれを行わしむべし」

これによれば、延暦年中（七八二〜八〇六）に、征夷大將軍坂上田村麻呂の論奏によつて、陸奥守小野岑守が「井口」の地に出羽国府を建置していたことがわかる。いわゆる「井口国府」だが、この

擬定地については、現在、国史跡に指定されている酒田市の城輪柵跡であるとする説が通説となっている。

さらにこの記事によれば、「井口国府」は嘉祥三年（八五〇）の大地震で壊滅的損害を受け、地形の変動によつて周辺が窪泥の地と化したため、議論を経た末、仁和三年に「旧府近側高敞之地」に移転したことが記されている。

この「旧府近側高敞之地」に移転した国府については、現在の八幡町の八森遺跡であるとする説が有力である。⁴⁾

八森遺跡は、城輪柵跡の東方約三キロメートルの八森丘陵上に位置し、発掘調査の結果、城輪柵跡政庁とよく似た建物配置が確認された。一辺約九〇メートル方形の囲み施設内に、正殿と考えられる七間×三間の礎石建物と、後殿と考えられる七間×一間の掘立柱建物跡、そして南辺には八脚門が確認された。いずれも建て替えはなく、単一時期のものである。造営年代は九世紀代と考えられている。遺跡の立地や存続年代などから、文献にみえる「旧府近側高敞之地」にふさわしい場所といえる。

さらに注目されるのは、八森遺跡のある丘陵のふもとには、元慶元年の縁起をもつ一条八幡宮、そして六所宮や古四王神社といった宗教施設が存在していることである（図）。「六所宮」が国府付近に多いことはこれまでによく指摘されていることであるが、本稿の関心からいえば古四王神社の存在が注目される。『八森町史』には、次のような記述がある⁵⁾。

町内には二社の古四王神社が祀られている。その一社は市条の八幡神社に合祀されており、合祀前は神社の裏山に当る鳥海水

道の貯水池付近の北側山麓（引用者注：八森遺跡の西側）に北向きの社として祀られていたもので、今でも古四王様の社地といつて、その場所が明確にされている。

現在も、八森遺跡の西側から丘陵を下りて一条八幡宮に抜ける「古四王道」が存在する。

八森遺跡が移転先の国府だとすれば、国府と古四王神社との関係を示唆する重要な事実といえるが、ここでさらに興味深いのは、この古四王神社が「高敞之地」といえる丘陵上に立地しているということである。

前稿で述べたように、『日本三代実録』貞観九年（八六七）五月廿六日条には伯耆、出雲、石見、長門等の国に四天王法を行わせたという記事がみえるが、そこには、「仍須^レ点^レ据地勢高敞^レ瞰賊境^レ之道場」。若素无^レ道場、新^レ据善地、建^レ立仁祠、安^レ置尊像」とあり、四天王法の道場の立地条件として「地勢高敞^レ瞰賊境」があげられている。八森丘陵の古四王神社は、日本海をのぞむ高敞の地にあるという点で、この条件に合致する。つまりこの地は、四天王法の道場としてきわめて条件に合致した地なのである。

ところで、この八森遺跡周辺は、条里制の痕跡をうかがわせる「市条」という地名、また、「六所宮」や八幡宮の存在、さらには「観音寺」という地名など、国府に隣接するにふさわしい地名や宗教的施設が数多く存在している。

このうち、荒瀬川の対岸に位置する観音寺地区は、現状では観音寺という寺じたいは存在していないものの、『日本三代実録』貞観七年（八六五）五月八日条に「以^レ出羽国観音寺^一預^レ之定額」とあり、

出羽国観音寺が九世紀半ばに定額を賜ったという記事がみえることから、かつてこの地に観音寺が存在していたとする説がある。

辺境における観音寺でまず想起されるのが、大宰府観世音寺である。大宰府政庁の東方約六〇〇メートルに所在する観世音寺は、もとはこの地で没した斉明天皇の追善供養のために天智天皇が発願したもののだが、和銅二年（七〇九）に造営が開始され、天平十八年（七四六）に至り完成し、大宰府付属寺院として辺境支配の拠点となった。

一方、陸奥国に目を転じてみると、多賀城政庁跡の東側にやはり観世音寺式の伽藍配置をもつ多賀城廃寺があり、多賀城の付属寺院であったと考えられる。ところで多賀城市の山王遺跡からは、「観音寺」と書かれた墨書土器が出土している。この墨書土器にみえる「観音寺」は、多賀城付属寺院である多賀城廃寺の呼称である可能性が高いことを平川南氏が指摘している。⁶多賀城廃寺が独特とされる観世音寺式の伽藍配置をもつこと、両寺院がほぼ並行して造営されたこと、大宰府と多賀城の対置など、いずれの条件をとつてみても、大宰府観世音寺に対して多賀城付属寺院の寺名が同じ「観世音寺（観音寺）」となることは、十分に可能性があるとしている。辺境の北と南の政治的拠点で、ともに「観世音寺（観音寺）」とよばれる付属寺院が存在していたことは、墨書土器の発見により明確になったと思われる。

加えて平川氏は、貞観七年の記事にみえる「出羽国観音寺」にも注目している。一つの可能性として、「律令国家の辺境支配として大宰府と陸奥・出羽両国は官人制、財政そして軍事制度において、ほ

ほ類似した政策が施かれた。その点で、大宰府・陸奥国に観音寺がそれぞれ創建当初から併置され、その後に出羽国にも観音寺が設置された」のではないかと延べ、さらに「この出羽国観音寺の擬定地は山形県飽海郡八幡町観音寺とされているが、平安時代の出羽国府が置かれたという城輪柵跡のすぐ真東に当たる点、興味深い」として、出羽国においても、陸奥や大宰府と同様に付属寺院として観音寺が併設された可能性を示唆している。

これらの事実を勘案すると、八森遺跡と同じ丘陵上に古四王神社があり、さらにそのふもとに観音寺という地名があることは、大宰府―大野城四天王寺―観世音寺というセツト関係、あるいは、多賀城と多賀城廃寺（観音寺）のセツト関係、と同様のものを想起させる。ここから憶測をたくましくすれば、平野部の城輪柵からの移転先の条件である「旧府近側高敞之地」として八森丘陵が選地されたのは、もともとこの場所に観音寺や四天王法の道場といった、出羽国における重要な宗教施設が置かれていたことと関係するのではないだろうか。いずれにせよ、出羽国府の立地条件を考える上でも、古四王神社と観音寺の存在は、今後きわめて重要な要素になっていくと考える。

このように九世紀段階の出羽国では、秋田城のほかに、移転した出羽国府にも四天王法の道場が置かれていたことが想定できるのである。

三 陸奥国の毘沙門天信仰と境界認識

ここまで述べてくると、同じ北方の辺境である陸奥国では、なぜ出羽国のような四天王寺の痕跡が明確に認められないのか、という

疑問が生じる。大宰府と陸奥国府多賀城が対置されているのだとしたら、なおのこと大宰府を意識した四天王寺が併設されてもよいだろうし、出羽国の場合と同じように、『延喜式』に四天王法会の財源についての規定がみえてもよいはずだが、そのことを示す史料は存在しない。

これに対する明確な答えがあるわけではないが、ひとつ思い起こされるのが、日本海諸地域における四天王法道場が、おもに海を隔てた新羅に対する調伏を目的として建立されているという事実である。そもそも、七世紀後半に新羅で四天王寺が建立された目的が、唐の調伏を目的とするきわめて反唐的なものであった。つまり隣国に対する脅威という局面において、四天王法が行われるのである。

出羽国の秋田城は新羅の脅威に対して作られた城柵ではなく、あくまで蝦夷に対する軍事的拠点として作られた。だが現実問題として、秋田城には日本海側地域に漂着した渤海からの使者が安置供給されるなど、日本海を隔てて存在する半島や大陸の諸勢力と無関係ではいらなかったのである。この点が、同じ北方の陸奥国とは大きく異なっていた条件であったといえよう。

ただ陸奥国においてもほぼ同様の仏教信仰は行われていた。それが毘沙門天信仰である。周知のように、毘沙門天は、四天王の中でも北方を守護する軍神であり、その点からも陸奥国で毘沙門天信仰が受容されていたことはうなずける。中国においても、辺境の城の城門に安置されていたのは毘沙門天像であった。加えて、平安時代の蝦夷征討に活躍した征夷大將軍・坂上田村麻呂が毘沙門天の生まれ変わりである、という伝承⁷も手伝って、毘沙門天信仰は陸奥国内

に広まっていったと考えられる。

陸奥国における毘沙門天信仰については、窪田大介氏の研究が注目される⁸⁾。窪田氏は、文献史料の分析から、鎮守府胆沢城における吉祥天悔過の目的が、諸国におけるそれと異なり、律令国家の蝦夷支配政策の一環をなすものとして行われたことを指摘する。そして、平安時代には吉祥天悔過の本尊として毘沙門天もまつられるようになり、岩手県に毘沙門天が多いのは、鎮守府の吉祥天悔過を通じて周辺の蝦夷系住民にも毘沙門天信仰が受容されたことを示すのではないかとしている。すなわち、蝦夷支配政策の一環として国家主導で行われた吉祥天悔過を契機として、その本尊であった毘沙門天が鎮守府の周辺地域に受容されていったとみている。毘沙門天信仰が周辺の蝦夷系住民にも影響を与えていたという点に、陸奥国側の毘沙門天信仰の特質がうかがえるだろう。

もう一点、これも窪田氏が強調しているのは、鎮守府における吉祥天悔過が、外敵に対する防衛という特別な意味を持っていたという点である。同様の吉祥天悔過が大宰府観世音寺においても行われていた(『延喜式』玄蕃寮・主税上)ことを考えると、日本海側諸国における四天王法と同様、辺境における境界認識を示す仏教信仰であることがうかがえるのであり、陸奥国内では、それが毘沙門天信仰としてあらわれたものと思われる。

ところで、岩手県の北上川流域に平安時代の毘沙門天像が多いことは有名である⁹⁾。鎮守府胆沢城周辺についてみると、東和町の成島毘沙門堂、北上市の立花毘沙門堂、江刺市の藤里毘沙門堂などが確認されるが、これらの毘沙門天堂はいずれも北上川の東岸に位置し、

しかも、小高い丘陵上に立地している点が共通している。すなわち、「高敞險瞰賊境」に築かれているのである。この点もまた、四天王法の道場の立地条件ときわめて類似しているといえるだろう。

おわりに

以上、前稿に加えて、辺境地域における四天王信仰、毘沙門天信仰の広範な存在が確認できたものと思う。

このようにみていくと、国府のほかにも、城柵や郡家といった施設と古四王神社の関係も今後の課題となるものと思われる。例えば、秋田県仙北町に所在する弘田柵跡は、出羽国の城柵として記録に残っている雄勝城であるとする説が有力であるが、この弘田柵跡の周辺の大曲市にも古四王神社があり、これについても慎重な検討が必要である。

また、山形県内に目を転じると、内陸部にも古四王神社の分布が確認できる(【参考資料】参照)。前稿で、四天王法は国府レベルだけでなく郡家レベルでも行われていた可能性があることを指摘したが、内陸各地に残る古四王神社がどのような意味を持つのかも、今後の検討課題である。

それにしても、第二節でみたように、八幡町の古四王神社や観音寺は、現存する寺社ではなく、地名や伝承としてののみ、その痕跡をとどめている。さらにこうした地名や伝承が失われた場合、これらの痕跡をさぐる手掛かりは完全に失われてしまうことになる。地域の古代史研究を進めていく上でも、地名や伝承といった手掛かりが、重要な意味を持つていることを強調して筆を措きたい。

注

- (1) 三上喜孝「古代の辺要国と四天王法」『山形大学歴史・地理・人類学論集』五、二〇〇四年。以下、「前稿」とはこれによる。
- (2) 四天王寺成典については、濱田耕策「寺院成典と皇龍寺の歴史」『新羅国史の研究』吉川弘文館、二〇〇二年（初出は一九八二年）参照。
- (3) 東潮・田中俊明編著『韓国の古代遺跡 I 新羅篇（慶州）』中央公論社、一九八八年。
- (4) 山形県八幡町教育委員会『八森遺跡 古代編・古代図録編』、二〇〇二年。
- (5) 八幡町史編纂委員会『八幡町史 上巻』一九七九年。
- (6) 平川南「墨書土器「観音寺」―多賀城市山王遺跡―」『墨書土器の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年。
- (7) 『公卿補任』弘仁二年条に、「大納言 正三位 坂上田村麿 五十四 此人身長尺八寸。胸厚一尺二寸。毘沙門化身。来護我国云々。」という記載がみえる。なお、保立道久「平安時代の国際意識『歴史をみつめ直す』校倉書房、二〇〇四年（初出は一九九七年）も参照のこと。
- (8) 窪田大介「鎮守府の吉祥天梅過と岩手の毘沙門天像」『歴史における史料の発見』平田耿二教授還暦記念論文集、一九九七年。
- (9) 東北地方の毘沙門天像については、大矢邦宣「東北地方の毘沙門天像」『坂上田村麻呂展』胆江日日新聞社、二〇〇二年などを参照。

【参考資料】自治体史における古四王神社についての記述

『鶴岡市史』上巻、一九六二年

四天王の信仰は征夷の将兵の勇気を鼓舞するところ大であったので、征夷の根拠地、秋田には四天王寺と四天王堂舎が建てられ（類聚国史）、仙北郡堀田の雄勝の柵址にも古瓦が出土し、四天王寺があったと見られている。

この様に四天王寺は常に柵内に建てられて、蝦夷調伏が祈願された。そのために延喜式には四天王修僧供養並法服料として二千六百八十束の稲が計上されていた。

東北地方には秋田城址の古四王神社を始めとして越王、高志王、古志王、故四王、腰王とも書かれ、同義と思われる神社が少なからず現存し、いずれも北方に向けて建てられている。山形県でいえば、荘内地方では西田川郡温海町五十川、鶴岡市由良、鶴岡市高畑町龍寛寺内（慶長十四年に鶴岡城より移されたと伝う）、飽海郡八幡町観音寺、同服部に古四王神社があり、内陸地方では長井市川原沢（巨四王）、長井市（腰王）、西置賜郡白鷹町鮎貝（越王）、同町高玉（越王）、村山郡大江町所部、山形市長谷堂（腰王）等が残っている。

これ等の古四王神社を先住民であった越族であったとする説がある。山形県文化史には、「越族とはツングース族で、中国史の東胡族、突厥族と同系で四千年も以前に中央アジアから進出して満州と沿海州に集結して居住していた。彼らは樺太、北海道から南下して内地に、沿海州から海を渡って佐渡島へ、そして北陸道を出羽海岸に、又は朝鮮半島から出雲地方に、一は九州地方に移動し、同じ先住民の旧アイヌ族

が太平洋岸を南下したのに対してツングース族は日本海岸を南下したようである。越族の故国は越国で今日越前、越中、越後の国が残り、それは越路の道であった。越族は考古学的に弥生式土器を残し、原日本人の名で呼ばれている」と論じ、わが郷土は昔越国だったから越ノ王を祭神とする越王神社が祭られていると結論しているが考古学の上からはツングース族の民族移動を証拠立てることは困難である。むしろ古四王神社は征夷の時代に崇敬された四天王が後世神社になったものと見る阿部正巳氏の説（国分寺の研究）の方が無難と思われる。古四王神社が北向きに建てられているのも、鎮護国家を基調とした奈良仏教が大物忌神や月山神等の神々に劣らず征夷の精神的支柱として大きな役割を果たしたわけである。

『白鷹町史』上巻、一九七七年

「古四王神社」

越王・腰王・古志王、巨四王・小四王・皇子王・高志王などと様々に書くが、いずれも同神を祀るものといわれている。主神ならびに由来については諸説があり、越族の王を祀るもの、越国の伸張を由来とするもの、秋田市古四王神社のように、阿部氏の祖大毘古命が武甕槌命を祀ったことに始まるとするものなどがあるが、いずれにしても東北地方の人が蝦夷と称され、中央権力が浸透し始めた頃、或いはそれ以前に由来するものが多いようである。現在まで確認されたことは新潟、山形、福島、宮城、秋田の各県に建てられていて、東北地方特有の神社である。山形県では、海岸線を北進した形のものと同内陸に入つたものが見られる。古四王神社の特徴は、いずれも北面して建つて

いることである。当町には他地区と比べてその数が多く、四力所知られている。大字高玉権現堂にあるのは越王と書かれておりかつては盗人神と呼ばれ、木造で東面している（元は北面していたという）。大字高岡小四王原の小高い丘にあるのは、石堂で北面している（元は木造であったという）。荒砥深山丘の南方畑の中に（旧道の傍）あるのは腰尾神社と書かれた棟札があり木造で東面している。十王にあるものは石堂で元の位置から移されて建ち、古くは「こしょう」の地名のところに在ったという。もう一カ所、大字横田尻中町西に、寛政十二年の水帳によると「こしょう原」の名があり、これも古四王神社に関わりがあるものと思われる。

『八幡町史』上巻、一九七九年

また、町内には二社の古四王神社が祀られているその一社は市条の八幡神社に合祀されており、合祀前は神社の裏山に当る鳥海水道の貯水池付近の北側山麓に北向きの社として祀られていたもので、今でも古四王様の社地といって、その場所が明確にされている。他の一社は観音寺の飛沢神社の境内に摂社として祀られている。古四王神社については、「越」にちなんで越後の国の移民にかかわる神社であるとか、一説には「越王」から征夷にあたって外敵や蝦夷から国を守る守護神ともいわれている。いずれにしても、律令国家の東北進出にかかわりのある神社として注目されている。

『川西町史』上巻、一九七九年

古四王神社

上小松の大光院の観音堂と本堂との間に石宮があつて巨四王神と書いてある。小形仁兵衛氏の調査ではもと藤ヶ森（現在のダリア公園）にあつたものをここに遷したもので古くから此の神を信仰する人々があつたという古老の話を聞いている。古四王とも越王、巨四王などとも書いたものがあるが西置賜郡白鷹町高玉には越王神社がある。

この神は崇神天皇の時代四人の將軍を四方に派遣して遠国を平定鎮撫させた四道將軍（伝承上の將軍）の一人大彦命（おおひこのみこと）が高志国（越の国）をよくおさめたので越の王の尊称をつけて神としてまつたものとつたえている。秋田県には国幣小社古四王神社があつたのを始め越後文化圏の海岸によく見られる神であるがこの置賜にも見ることができるのはあきらかに日本海岸との交流があつたことを示すものである。ただこのことは置賜地方の文化に影響を与えたと考えるまでには至らないのであつて、熊野や諏訪の信仰のようにひろく置賜人の心を捉えたとは言いがたいが日本海岸の文物が入ってきていたことを示すものであり従つて中央文化もその経路によつて置賜に入ったとみることは決して無理とは言いがたいのである。

『長井市史』第一巻（原始・古代・中世）一九八四年

「古志王神」

「コシオウ」はいろいろな漢字があてはめられている。「越王」「高志王」「古志王」「古四王」「胡四王」「巨四王」などかなり多様である。漢字にこだわることは危険であるが、「越の国の王」を祀つたのが越王

神社であろう。越の国は始めは越前・越中・越後をあわせた北陸全体をさす広大な国であつた。

「越の王は」『姓氏録』によると、孝元天皇の息子で四道將軍として北陸地方の巡察を命じられた大彦命の子孫であり、阿閉臣・膳臣・阿倍臣・狭々城臣・筑紫国造・越の国臣・伊賀臣の七族はすべて大彦命を始祖とするといっている。成務天皇の時代に高志の国造となつた市入命は大彦命のこの大稲興命の子となつており、大稲興命は大宇奈具志のことであつて、別にいう「宇奈の越君」のことである。宇奈の越君は延喜式でいう古志郡六座の宇奈具志神社の祭神であり、越王系の神であるといわれている。

越の国の王が大宇奈具志であり、古志郡の宇奈具志神社の祭神が越の王であつた宇奈具志であることはいいとして、彼が大彦命の子孫であるということは、『姓氏録』をつくるとき、ヤマト朝廷が新しく服従した地方の力のある氏族を処遇する一つの手段として多くの場合、その先祖をさかのぼると必ず天皇の子孫か、ヤマト朝廷系の神々の子孫になるように系図をかきかえた形跡があるので、「越の王宇奈具志」は「大彦命の子孫」という説は信用することはできない。

山形県の越王神社の分布は、庄内平野と長井盆地とその隣接地域に限られている。越後から庄内平野を北に向かつて開拓がすすめられたことは歴史的に明確な事実であるが、

村社	古四王神社（大毘古命・大山祇命ほか）	温海町大字五十川鳶ヶ崎
無格社	古四王神社（大毘古命・大山祇命ほか）	豊浦村大字由良字古四王
無格社	古四王神社	鶴岡市
無格社	古四王神社	市條村

無格社 古四王神社

北遊佐村

無格社 古四王神社（経津主命ほか）

稲川村庄泉

無格社 古四王神社

観音寺村

と、七社が分布している。西置賜では

無格社 腰王神社

長井町

村社 巨四王神社（大己貴命・大山祇命ほか） 西根村河原沢字巨四王森

無格社 越王神社（事解男命ほか）

蚕桑村高玉字権現堂

無格社 腰王神社

鮎貝村

無格社 腰王神社

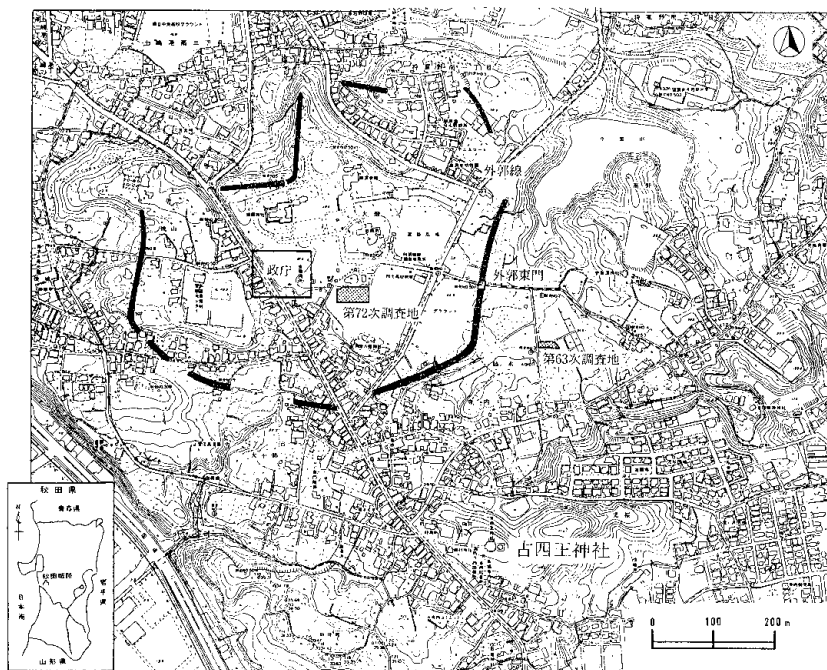
西村山郡本郷村所部

無格社 腰王神社

南村山郡本沢村長谷堂

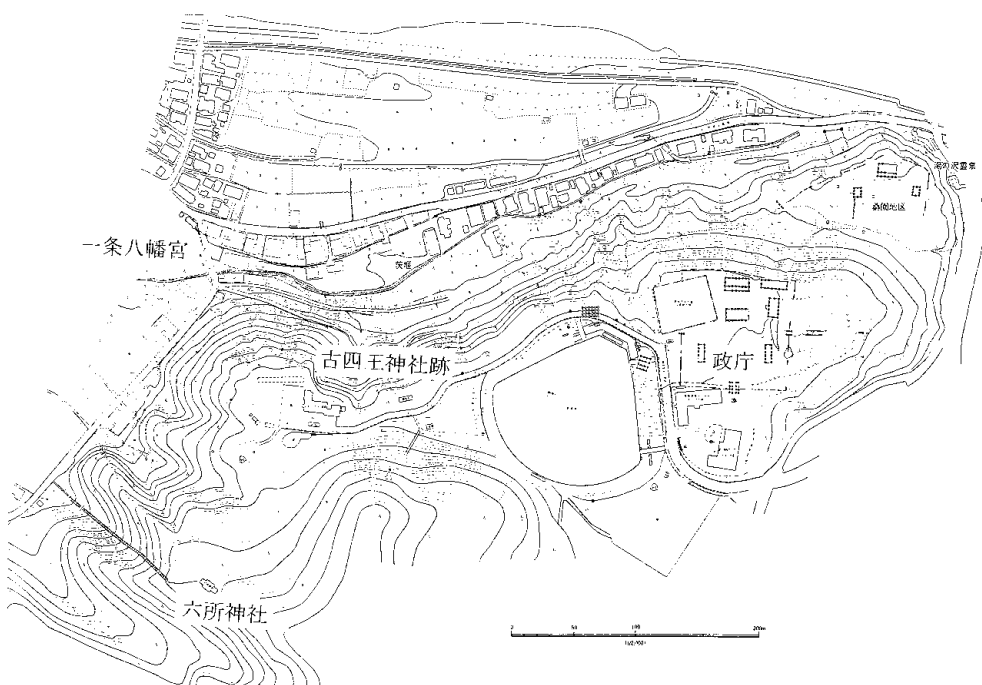
とほぼ西山山麓を北上し、西村山の本郷と南村山の長谷堂まで分布している。置賜地方には中世から近世にかけて新潟県の移住者はかなり多く、長井にもその祖先が新潟県出身を名乗る者が多い。古代において荒川の下流に磐船の柵がつくられ、周囲の開拓が進んだとき、荒川をさかのぼり、宇津峠を越えれば広々とした長井盆地や米沢盆地がひらけているので、小国越えの移住者や文化の流入があったものと考えてもいいだろう。

〔付記〕 本稿は、二〇〇四年度山形大学人文学部「独創的・萌芽的研究活動支援」（研究課題「古代における境界認識の変遷と地域信仰に関する基礎的研究」）、ならびに文部科学省科学研究費若手研究（B）による研究成果の一部である。



秋田城跡・調査地位図

伊藤武士「秋田城跡の発掘調査成果」『日本考古学』10、2000年の図を一部改定



八森遺跡地形図（『八森遺跡 古代図録篇』八幡町教育委員会2002年の図を一部改定）